

知求会ニュース

2006年09月

第19号

◎ 入学おめでとうございます！

国際文化研究専攻 2 期生の**イワノワ ゲルガナ エンチェワ**さんがブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）アジア学研究科博士課程に入学されました。ゲルガナさんはブルガリア出身で4年半前に宇都宮を離れ、カナダに移住されました。その後ご結婚、夫君の病気、出産とめまぐるしく変わる環境に対応されてきましたが、今秋念願の博士課程の進学が決まりました。心からお祝い申し上げます。また今後の研究成果を期待しています。

◎ 国際学部に博士課程設置

7月8日付け日本経済新聞と下野新聞に、来年度における博士課程の新設記事が紹介されました。懸案になっていた博士課程設置がいよいよ本格化します。皆様のご支援をよろしくお願いします。特に、他大学院博士課程進学者のご協力を切に大学院国際学研究科同窓会からは願っています。

◎ 掲載記事紹介

1. 朝日新聞 平成18年5月12日(金)に、「大学の窓から－98 民間経営手法 動き加速」のコラムで**中村祐司**先生の記事が掲載されました。同紙5月19日(金)に「大学の窓から－99 教育活動で万引き抑止」、同紙5月26日(金)に「大学の窓から－100 活字の魅力 失わせぬ」の内容で連続掲載されました。なお、100回をもって、このコラムは完結しました。中村祐司先生の長い期間にわたる執筆、大変お疲れ様でした。

2. 下野新聞 平成18年5月22日(月)に、私の下野新聞批評「多角的な声 生かす方法を」と題した**松金公正**先生の記事が掲載されました。

3. 下野新聞 平成18年6月13日(火)に、**松井貴子**先生提案の公開講座紹介記事「俳句で豊かな人生に」が掲載されました。

4. 下野新聞 平成18年6月26日(月)に、私の下野新聞批評「地方紙にも国際的視点を」また同紙平成18年7月31日(月)に、私の下野新聞批評「異文化交流 さらに紹介を」と題した**阪本公美子**先生の記事が掲載されました。

5. 読売新聞 平成18年7月21日(金)に、外国籍児童・生徒の調査結果「授業分からず6割」と題した**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。

◎ 宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会報告

平成18年度第一回の会合が、5月13日(土)午後1時半から宇都宮大学第2会議室で開催されました。出席者は菅野長右エ門 学長・水本忠武 理事・西田 靖 理事・海野 孝 理事・村松君雄 理事・友松篤信 学長特別補佐の大学側6名と事務局担当者6名、岡本英子 国際学部同窓会副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・落合信夫 工学部同窓会会長・和賀井睦夫 農学部同窓会副会長・笠原義人 農学部同窓会理事長の同窓会側8名でした。議事内容は、検討事項として、1. 旧講堂等の修復構想と募金(案)について 2. 各学部等同窓会連絡協議会の年間開催スケジュール(案)について や各同窓会からの活動報告及び要望等、そして大学の現状報告等がなされました。

平成18年度第二回の会合が、8月5日(土)午後1時半から宇都宮大学第2会議室で開催されました。出席者は学長代行西田 靖 理事・水本忠武 理事・海野 孝 理事・村松君雄 理事・友松篤信 学長特別補佐の大学側5名と事務局担当者6名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・岡本英子 同副会長・オブザーバーとして丹治裕樹 同理事と田中幸生 同理事・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・直之 進 工学部同窓会副会長・安達久博 同副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・笠原義人 同副会長の同窓会側12名でした。議事内容は、検討事項として、1. 旧講堂等の修復構想と募金(案)について 2. その他 や各同窓会からの活動報告・要望等、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 国際学部だより

1. 国際キャリア合宿セミナー2006 開催

9月23日から25日の三日間、宇都宮市駒生にある栃木県青年会館にて開催されます。毎日新聞 平成18年8月1日(火)の記事の中で、昨年の参加者 [浅井菜江見](#)さんは「モチベーションの高い人が集まり、刺激になった」と話し、参加を呼びかけている記事が紹介されています。

2. 掲載記事紹介

下野新聞 平成18年5月13日(土)に、「宇大OB制作のイラク映画上映」と題した国際学部OB [谷澤壮一郎](#)さんの記事が掲載されました。

下野新聞 平成18年5月17日(水)に、宇都宮に住んでみて⑤「沖縄出身の宇都宮大生 「基地」問題意識に温度差」と題した [具志堅有美](#)さんの記事が掲載されました。

下野新聞 平成18年6月22日(木)に、平和と国際協力の列島シンポジウム「交際協力の輪を広げよう」と題したパネルディスカッションに [猿舘絵理](#)さんの記事が掲載されました。

毎日新聞 平成18年7月23日(日)に、「宇都宮大学留学生がユネスコ研究会」と題したモ

ンゴルからの留学生**エルカ**さんの記事が掲載されました。

毎日新聞 平成 18 年 8 月 1 日(火)に、「キャリア合宿セミナー」記事が掲載されました。

研究室訪問 10 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 10 回目には、国際社会交流研究講座所属の松尾昌樹先生にお願いしました。

「研究室案内 松尾研究室」

松尾 昌樹

私は湾岸アラブ諸国、特にオマーンの国民統合を、歴史学的手法を用いて研究しています。オマーンはアラブ・イスラム世界の中でも、イバード派という特異な宗派の影響が強い点に特徴があり、この宗派は現在のオマーンの政治・社会に大きな影響を与えています。

アラブまたはイスラムという単語は、日本社会ではまだ遙か彼方の異世界を連想させるようで、学生の皆さんは私がなにやら非常に難しいことを研究していると思っ

ていますが、それは誤解です。アラビア語で書かれたオマーンの歴史書やイバード派の教義解説書を読み進むことは、それはそれで困難な作業ですが、そもそも研究には困難がつき物で、これはアラブないしイスラム研究に限定されることではありません。個人的には、これらの書籍を読み進めることで新たな知見を得られることは、何よりも大きな喜びであり、研究の面白さはそのような発見にあると考えています。

歴史とは、過去の真実の記録ではありません。過去の記録を分析することで真の過去に到達できると信じる人もいますが、私の見るところ、これらの記録は過去の人々によって「残すべき情報」と判断され、選り分けられたもので、必ず歴史記述者の偏向が内包されています。このため、どれほど多くの歴史書を読んでも、客観的な真の歴史には到達できない、と私は考えています。一方で、過去の人々がどのような出来事を将来に残すべき対象と見なしたのか、もしくは残すには不適切と判断して消去したのか、といった視点で歴史を見ると、まだまだ広大な研究領域が残されています。

今日の我々の社会においても、過去の出来事の取捨選択・再評価が大きな関心と共に行われていることは、日本とその周辺諸国との近年の歴史認識問題を見れば明らかです。歴史を作るのは歴史家ではなく、現代を生き、過去の取捨選択を行う個人なのです。人間集団は常に歴史の共有を志向しているのです。歴史の共有を通じてのみ、人間集団の紐帯が成立すると見なしても行き過ぎということはありません。それは日本でも、世界中のどの地域でも共通する現象で、私はこのような視点をオマーンに当てはめて、研究を行っています。

ところで、この原稿は出張中のシリアで書いています。つい先日まで、隣国のレバノンはイスラエルから侵攻を受け、ヒズブッラーがイスラエルと戦闘を繰り返していました。レバノン人は、今回の戦争をどのように自身の歴史に組み込むのでしょうか。ヒズブッ

一の指導者であるナスルツラ師の絶大な支持を確認しつつ、将来に書かれるであろう今回の戦争の評価に、思いをめぐらせています。

特別寄稿 今回は以前から執筆依頼をしていた編集者の知人、石井亮平氏に原稿をお願いしました。

「青年海外協力隊生活を終えて」

平成 15 年度 3 次隊 (04 年 4 月～06 年 4 月) タンザニア 土木施工 派遣

石井 亮平

初めまして、台風が訪れる夏、皆様元気に過ごされたでしょうか。あるタンザニア人は、先進国のエネルギーの使いすぎが環境変化を招き、私達の生活をも脅かしていると言っていました。農作物の収穫量が落ちて市場価格が上がっている、それは雨期に雨が降らなくなったのが原因だ。そのような話からでした。私は縁あって編集者のご厚意を頂き、今回の寄稿となりました。

私は6年間の日本サラリーマン生活後、2004年4月から2006年4月までの2年間を、青年海外協力隊の一員としてアフリカはタンザニアの首都ダルエスサラーム（日本政府は前述都市を、タンザニア政府はドドマを首都としている）にて活動をしていました。職種は土木施工、水資源学校（日本の短大のような所）で講師をしていました。今回は協力隊に参加したが故に考えさせられたことについて、主観に基づいて書いてみたいと思います。

参加する以前の協力隊のイメージ。日本の若者が世界の貧しい国に住み、それら国の発展のために寄与するボランティア。以後のイメージ。日本の大人の研修旅行。この言葉に語弊はあるのかもしれないが、あくまで私のイメージ。これは任国赴任前の日本での研修から始まる。100を超える職種を持つ20歳から40歳までの人が一堂に集まる。恋に落ちる者もいれば、語学などのプレッシャーから悩む者もいる。そして新しい知識、仲間を得て各任国に。病気や事故、妊娠やルール違反（事務所の許可無く国境を越え遊びに行くなど）で途中帰国する人もいるけれど、多くの人は2年間の期間を全うする。任国での生活はJICAの手厚い加護（定期健康診断、交通安全講習などなど）の下に行われる。一人の友人は飛行機とバスを使って首都から2日半の電気が全く無い村が任地であった。そこにソーラーパネル設置を義務付けられる。夜、村中で一軒だけ電気を点けるため、実際は緊急時の連絡手段として無線を動かすため。しかし雨期には電気は殆ど溜まらず、無線も電波が悪く使用頻度が低いため使用せず。そして衛星電話の貸与。電気もない村の一軒にソーラーパネルとアンテナが。

結局、任国の人と同じ生活をとと言われても、首都に上がれば高級レストラン、ノートパ

ソコンにデジタルカメラなどを持ち、度々リゾートへ旅行。日本人であることを認識させられる2年間。同じ家に住んでいても、やはり持ち物もそして望んでいるものも違っていた。

任国であったタンザニア首都のインフラは、一見日本の都会のそれと見間違える程である。朝夕は大渋滞の2車線舗装道路、十階建てを超えるビル。しかしながら実際は度々の停電で当てにならない信号、違反を見つけては現金を要求する警察官。そして一足中心部から離れると、バケツを頭に載せて運ぶ女性、裸足でサッカーをする子供たち。実際に住んでみなくては分からないこと。観光客も度々訪れるが、高級ホテルにレストラン、サファリツアーにと、中々一般的な人々と触れ合うのは難しい。そのような中、やはり協力隊の制度は素晴らしかった。皆多くの任国や他国の友人を作り交流していた。

タンザニアでも中国人は多く住んでいて、中華料理のレストランも数多くある。最近では韓国のボランティア団体も多人数を派遣してきている。町で会うと、どこの国の人か分からないため、まず会釈。これが返ってくると大概日本人。

次に専門である土木の現状について。多くの構造物は維持管理というのがなされていないというのが現状かと。既に傾いていて倒れそうな擁壁の下で水汲みをする人々。配線が盗まれもちろん点かない街灯。普段は水が来ないのに、来ると途中で管から抜き取られる水道。歩行者専用なのに中央部橋脚が20cmぐらい沈下している橋。等々。学校で習う技術は高く、先進国それと差ほど差異はない。というのも、高学歴の先生は外国の学校に留学した経験があり、また教科書も外国からのものであるから。しかしながら、維持管理は殆どなされていない。古い道路を補修するより、新しい舗装道路がもっと必要と考えているのかも知れない。そして大きな構造物は外国からのお金に依存している。そうすると維持管理にまわすのは難しいのも必然。最近はそのような弊害をなくすため、援助を受ける側に裁量が任されるような制度もできたというのが、それもこれからに期待である。

地方に行くと現状はもっと酷く、現場に行くのもガソリンが買えないということで待機、ということもしばしば（ガソリン価格は日本より10円から20円程安い。物価は100円でコーラの瓶を4本、月収は1万円～2万円程度あれば良いサラリーマン）。当然技術者のレベルも低くなり、道路の曲率やボックスカルバートの位置を図面があるにも関わらず現場打ちで合わせる（土地に余裕があり、器具も良くないので現実的と言えれば現実的とも言える）。測量器具も最新のものから、見たことがない程古いものまでが混在している。もちろん調整はされていないため、誤差が誤差と呼べない程である。

協力隊に参加してみて一番良かったこと。それは色々な人と知り合うことができたこと。私にとってはこれに尽きる。日本人だけでも、職種も年齢も違う同じ協力隊員。大使館やJICAの人々とその家族。企業の出張で来ている人。自転車世界一周をする途中で寄った人。そしてもちろん現地に根を下ろして暮らしている人。本当に色々と助けてもらい、そして勉強になった2年間。もちろん日本人以外のタンザニア人や韓国人の友人にも感謝している。料理を作らない私に、沢山の郷土料理をご馳走してくれた友人達。

もし、まだ協力隊に参加しようかどうか迷っている人がこの文章を読んできたのなら、私は迷うことなく背中を押します。青年海外協力隊は素敵な経験を与えてくれます。ぜひ、思い切って頑張ってください。

読んでくれた皆さん、このような機会を与えて頂きありがとうございました。私はもう一度タンザニアに赴任することになりました。今度は日本の民間企業の現地社員としてです。タンザニアに来られる際はぜひご一報ください。その日をアフリカはタンザニアで楽しみに待っています。

知究人 05 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 19 号の第 5 回目は、国際学部第 6 期生 丁研究室 OG の梁 智英(ヤン・ジョン)さんをお願いしました。

「筑波からの便り」

筑波大学大学院 人文社会科学研究科 梁 智英

先日宇都宮大学に行ってきました。同じ研究科の満州文学を研究している先輩が満州に関する資料調査のために宇都宮大学へ行くこととなりそのついでに連れてもらいました。久々に訪れた大学は夏休みのこともあり静かで、真夏を感じさせる蝉の音や夏の香りや新緑などの見慣れていた風景が、宇大で過ごした 4 年間の大学時代をよみがえらせてくれました。とても懐かしい気持ちになりました。そしてご無沙汰でした丁先生や佐々木先生にお会いでき何よりも嬉しかったです。

宇都宮大学を卒業しここ筑波大学大学院に入学してきて、もう 3 年目になります。2000 年に宇都宮大学に入学した私は、国際学科研究科の国際文化を専攻し、丁先生のところで論文指導を受けながら書いた卒業論文(『白樺』派と 1920 年代の韓国文壇に関する研究―柳宗悦と有島武郎を手がかりとして―)がきっかけとなり大学院の進学を決め、ここ筑波大学大学院にきました。

今年博士課程 3 年次(一般に言うと博士 1 年次)になる私は、人文社会科学研究科というところで文芸・言語専攻の総合文学という領域で研究しています。去年中間評価の論文(修士論文)として「柳宗悦の民芸運動にみる「不二論」」を提出し、現在も柳宗悦にすがり付きながら研究を進めている状態です。

ところでここでこの研究科について簡単な紹介をしてみますと、この研究科はこれまでの哲学・思想研究科、歴史・人類学研究科、文芸・言語研究科、社会科学研究科、国際政治経済研究科とを改組・再編した 5 年一貫制博士課程研究科で、哲学・思想専攻、歴史・人類学専攻、文芸・言語専攻、現代文化・公共政策先行、社会科学専攻、国際政治経済学専攻の 6 専攻からなっています。特に私が専攻している文芸・言語は文学分野と言語学分野からなっていますが、特に文学分野は、総合文学・日本文学・イギリス文学・アメリカ

文学・フランス文学・ドイツ文学・中国文学の 7 領域から構成され、総合文学領域では一般文学理論・比較文学、文学・文化の超領域、西洋古典文学を基礎とする西欧文学の歴史的展開等の研究が行われています。細い説明から見て分かるように人文科学研究科では、従来の文学テキストに基づくカノンの研究よりも、新しい社会的・学問的要請に答えられるような、広い視野や優れた独創性が求められる先端的な研究が進行されています。したがって、私の研究対象のように小説などの文学テキストを持っていない柳宗悦の研究も可能なわけです。この総合文学領域には多くの留学生がいて、違う国の人間が集まり日本語という共通の言語を使いこなしながら日常の会話はもちろん研究に関する議論もします。また、研究様相も多様で、違う研究テーマを持つ研究者の卵達が互いに刺激し合いながら自分の研究のために邁進しています。

最初私が筑波大学に訪問客として訪れたのが、宇都宮大学 4 年生の時で、卒業論文に必要な資料を探すためでした。その時の初見の筑波印象を未だに覚えています。図書館の広さと多くの資料、そして、研究学園都市という名の通りにそこらにあるような都市とは違う落ち着きと、自然に囲まれた美しい景観など…。最初丁先生がこの大学院を進めてくださった時のことが思い出します。研究する環境としては一番で、何より私の感性とぴったり合うところだと、そうおっしゃってくれました。

考えてみるといろいろなことが縁となり宇都宮から現在の筑波まで、私の望んだ環境で留学生生活を過ごすことが出来たのではないかと思います。筑波は宇都宮大学からは車で 2 時間もしない距離に位置していますので、宇都宮大学を卒業するまでに資料調査という名目がかねて一度遊びに来てみてください。ここは四季のどれも負けないぐらいに自然の美しいところなので、夏じゃなくてもいいですよ。きっと私が感じたことが皆さんにも感じられると思います。そしてそれが縁となり、また違う世界が広がって行くかもしれません

フォーラム 第 4 号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。 2006 年の長月を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 今回は、田巻研究室 OB・藤田敏文さんと国際交流研究専攻第 1 期生柄木田研究室 OB・小林一男さんにお願ひしました。

「現地調査についての雑考」

藤田 敏文

皆さん、お久しぶりです。早いもので国際学研究科を修了してから一年が経ちました。現在は東京で就業中です。残念ながら、希望した職種につくことはできず、前職のキャリアを生かした IT 関連の業務を行っています。

在学生の皆さんにとっては、これから来年 1 月の提出に向け、ますますお忙しくなることと思います。選ばれたテーマによっては、海外に滞在し、調査をされる方もいらっしゃる

ることでしょう。私は2003年の10月と、2004年6月の二度にわたってトルコ共和国での文献収集を中心とした調査を行いました。これまで、これらの調査で経験したことについて、発表したことはありませんでしたので、この機会に簡単に報告を行いたいと思います。

まず初回の2003年の調査についてですが、これは端的に言って「時期尚早」というべきものでした。恐らく多くの学生が、修論のテーマの核心部分に関して、論文提出まで紆余曲折があると思います。その意味では、提出予定の一年以上前での調査というのは、集めたデータすら使われなくなる可能性があるということです。

具体的には、提出された論文にとって、この時の調査で有益だったといえるのは、調査の対象の後継政党に直接訪れた折の、漠然とした印象だけだったと思います。

とはいえ、この時のトルコ行きは、確実に次回の調査へと繋がっていきました。衰えがちだった語学を復活させるためだけでも、その成果はあったのです。その意味で、どうしても必要な調査行ではありました。

しかし次回、結果として最後の調査となったトルコ行きでも、提出までまだ時間がありました。そのため、直前までどのような文献を、どのように集めるのか、具体的なイメージに乏しいままでした。実は、提出の3～4ヶ月前に三度目の訪問をするつもりでした。つまり、どのような修論になるのか、出発の時点ではそれほど纏まっていなかったということです。

また、出発まで一ヶ月を切った時点で、予定していた図書館での調査が不可能だと分かりました。煩雑な事務手続きが必要で、その許可には一ヶ月の時間がかかるとのことでした。これもまた計画性のなさに起因する失敗でした。

結局、一番効果的だったのは「現地での直接交渉」でした。正式な手続きを踏むと非常に煩雑なことも多いのですが、現地で「日本からはるばる、皆さんの友達が調査にきました」といった風に人情に訴えかけると、そのまま通ることがしばしばでした。この方法で、アンカラの国会図書館での調査を許可していただきました。

近年のインターネットの発達により、必要だと思われる文献の検索が事前にできていたこと、これが最終的には有効でした。このため、効率よく文献を集めることが出来ました。しかし現地でなければわからなかったことも多く、地域研究では「現地主義」「現地語主義」は重要であることを身をもって知りました。例えば私の場合、トルコ政治において重要な転機になった「2月28日過程」の公的文書を探していました。しかしこのときに軍部を中心とした「国家保安協議会(MGK)」がエルバカン首相に提出した改善要求の公的文書は、公表されていないことが国会図書館の現場でわかったのです。このときの会議は秘密会議であり、国家機密扱いであったのがその理由です。

結局のところ、この二回目の調査で集めた膨大な文献、資料を中心に修論を書き上げることができました。三回目の調査がもしあれば、題目にも名を出した元首相のエルバカン氏に会って話を聞くことが求められたと思うのですが、かないませんでした。これも自分の至らなさだったと思っています。

在学生の皆さんには、今回のこの簡単な報告を反面教師としていただきたいところです。まとめるとこのようになるでしょうか。1. 現地調査は適切な時期に行うこと、2. 日程が決まれば、ビザや許可などの事務手続きを早めに行うこと、3. 調査に必要なことで、日本でできることはなるべく行うこと、4. アポなし、許可なしでもとにかく行ってみる、などになると思います。

これから修論を執筆される皆さんの、学問的成果に期待して、この小文を終えたいと思います。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期修了生)

「ボクが協力隊員になったわけ」

小林 一男

えびそらど I

12年前、ボクはスクールウォーズな工業高校で地理教師をしていました。留年生3名を含む機械科43名を3年間担任し、その間10名の退学届にハンを押し、33名を卒業させた直後のことでした。進路指導部で就職以外の担当(ちなみに担当者はひとりだけ)だったボクのところへ、ある日郵便物が。「青年海外協力隊募集要項在中」、封筒にはそう朱書きされていました。・・・すみません。その郵便物、ボクがいただきました。

えびそらど II

募集締切前々日、夜のことです。例の封筒のこと、思い出しました。今日願書を書いて、明日速達で出せば、明後日到着?今と違って、当時は願書の記入欄が多く、記入完了まで数時間を要し、寝るころには外は明るくなっていました。「職種」って何だ?協力隊員になるには、何らかの専門性を持っていなければならないらしいのですが、ボクには当てはまるものが何もありません。職種一覧表には無数に職種名が書いてあるのですが・・・。「日本語教師」、悩み抜いた末にボクはそう書いて封をしました。日本語のネイティブなんだから、できるんじゃない?次の日、昼食の買出しのふりをして、昼休みに中抜け。郵便局から速達で発送しました。速達料金って高いなあ、ってその時思いました。

えびそらど III

一次試験当日は雨でした。布団の中で葛藤しましたが、何とか布団から抜け出しました。徹夜で願書書いたし、速達料金も払ったし、嘘ついて中抜けしたし、そして何よりも「どんな奴等が協力隊っていうのに行こうとしているのか」知りたくて。試験会場の場所もよくわからず、最寄り駅で降り、人の流れに身を任せました。が、人の流れが消えてしまいました。もう集合時間です。あの八百屋で訊いて、遠かったら帰ろう。八百屋の目の前が試験会場でした。受付は終わっていましたが、会場には入れてくれました。雨の中急いで歩いてきたので、雨と汗とでびしょ濡れです。汗を拭いているうちに、「職種」に関する技術試験が始まりました。分厚い冊子が渡されました。すべての問題が、この一冊に収められているのです。「日本語教師」のページを開きました。・・・一問もわかりません。「代表的な日本語テキストを例示して、その長所と短所を述べよ」、確かそんな問題だったように記憶しています。日本語テキストなんて、知るわけない。こりゃ時間の無駄だ。帰ろうかと思ひ、何度も腰を浮かせかけました。徹夜で願書書いたし、速達料金も払ったし、嘘ついて中抜けしたし、そして休日の雨の中電車賃払って来たんだから、もうちょっといてやるか。ついでだから、何か書いてやるか。さっき汗を拭いているとき、「職種」の変更ができる、そんなことを言っていたのを思い出しました。探しました、できそうな、ではなく、書けそうな問題を。最初のページから、最後のページまで、すべてのページを何度も繰り返して。候補にあげられたのは、「文化人類学」と「村落開発普及員」。どちらもすべて論述問題です。「文化人類学」は音楽の問題がひとつあったので、「村落開発普及員」を選んで答えました（ちなみに、後日判明したのですが、「文化人類学」は要請1件に対して受験者108名、競争率108倍でした）。すでに試験時間は半分を過ぎています。何とか時間内に書き終えました。昼休みは願書の書き直しでつぶれました。昼食抜きで午後の試験に突入。帰る頃には、雨はあがっていました。数週間後、忘れた頃に結果が郵送されてきました。思いがけない結果でした。

えびそうど IV

高校生の就職活動は、夏休み突入直後が会社訪問の時期です。進路指導部は総動員体制で、あらゆる事態に備えます。二次試験はこの時期と重なりました。だから諦めていたのですが、思わぬ事態が・・・。地方の短期大学の学校説明会が入ったのです。指定校推薦を頂いている付き合いのある学校です。そして、進学担当はボクひとり。当然ボクが行くことに、それも前泊で。その前泊する予定の日が二次試験の日でした。その地方へ向かったことにしておいて二次試験を受け、次の日始発で出発し何食わぬ顔で学校説明会に出席しました。だって、徹夜で願書書いたし、速達料金も払ったし、嘘ついて中抜けしたし、休日の雨の中電車賃払って一次試験に行ったし、だいいちせつかく一次試験通ったんだから。ところで、面接試験では派遣希望国を訊かれたので、空時間に見ていた要請リストの中から「是非とも、ミクロネシア連邦に」と答えました。「それ、キャンセル」・・・啞然、です。前任者が、土壇場になって任期延長したのでしょうか。

えびそらど V

結果は補欠でした。補欠になると、次の募集時に応募すると一次試験免除です。これはいける、ボクは確信しました、次は絶対受かる。この時点で、初めて校長に相談しました。これこれの事情で、「退職して」協力隊に参加したいと思っていたのですが、これこれの事情に変わったので、「現職のまま」協力隊に参加できないだろうか、と。「現職参加」という制度があるのですが、これを使うためには応募時に了解を得ておく必要があります。最初は、どうせ受からないと思っていたので、万が一受かったら「退職」のつもりでした。が、事態は変わりました。校長も動いてくれました。感謝、です。思いは既に南太平洋に向かっています。

えびそらど VI

二度目の二次試験です。要領を得たものです。作戦をたてました。募集要項の要請リストを研究し、トンガとフィジーに目をつけました。学部生時代に漁村調査をしていたので、是非南太平洋の島国へ行きたかったのです。面接では予想通りの展開、こちらの要望も充分伝えることができました。絶対合格、それも希望国への派遣を確信しました。帰り道、「地球の歩き方フィジー」を買って帰りました。頭の中は、パラダイス。腰囊が揺れ、レイが飛び交い、トロピカルな気分ですその冬を越しました。・・・間もなく、合格通知が届きました。派遣国「ネパール」。現職参加の手はずが整っていたため、今さら断わることもできず。海の家から、一気に隆起して山の国、それも世界一の山の国へ。太平洋に向かって叫んだボクの「バカヤロー」は、その後二年間ヒマラヤの峰々に幾重にもこだまし続けました。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期修了生)

◎ 外部評価報告書の掲示

本年の3月末に報告された外部評価報告書は、大学の国際学研究科ホームページに詳細が公開されています。<http://www.fis.utsunomiya-u.ac.jp/fis/indexjg.html> (HPにアクセス後、右下の外部評価報告書を開く[repore1805.pdf]と見ることができます。)国際学部同窓会会長、国際学研究科同窓会会長、1期生留学生代表、1期生社会人代表から構成された4名の外部評価委員が作成したものです。同窓生におかれましても、大学院および大学の益々の発展を願い、多くのご意見とご感想をいただければ幸いです。

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へ**のお願い：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net